

PTSDバネ心のケア

JR脱線で負傷

JR福知山線脱線事故で負傷した茶谷友一さん(25)(西宮市)が、心の病を持つ人たちを支える精神保健福祉士の資格を2度目の挑戦で取得し、4月から県内の相談機関で働き始めた。事故後、心的外傷後ストレス障害(PTSD)で苦しんだが、専門家に話を聞いてもらって救われた。「今度は自分が聞き役に」。つらい経験を前向きに生かし、人生の大きな一歩を踏み出した。

(井上大輔、沢野未来)

今月から精神保健福祉士 西宮の25歳・茶谷さん

なるだけでなく、住居や就労の問題で助言できる精神保健福祉士に興味を持ち、2009年春から専門学校で勉強を開始。翌年1月の試験では、直前に潰瘍性大腸炎を患い、不合格に終わった。落ち込んだが、「選んだ道。やるしかない」と専門学校仲間らと深夜まで猛勉強。今年3月、念願の合格を果たした。

始めたばかりの仕事は、けっこう忙しい。患者の家族に医師や病院を紹介しながら、うつ病患者の相談に乗る先輩の横で耳を傾け、アドバイスの方法を習得する毎日だ。自身はまだ、電車に乗れない時があるなど克服すべき課題を抱えているが、「あの事故を経験した自分だからやれることがある。苦しみを抱える人と少しでもつながることができれば」と意気込みを見せている。来年は知的障害者らの援助もできる社会福祉士の資格を取るつもりだ。



事故の経験を前向きに生かし、今月から相談員になった茶谷さん

事故では5両目について軽傷だった。だが、多数の犠牲者を目の当たりにしたせいか、電車に乗るなどするたびに血のおいが鼻腔に

PTSD。通い始めた診療所で事故当時のことをしゃべり続けた。不安にさいなまれたが、精神科医とカウンセラーがひたすら聞き役に徹してくれたおかげで症状は改善。彼らの存在の大きさに魅了され、「心のケアを将来の仕事に」との夢が芽生えた。

精神病患者の相談相手に